あの日あの時

福島民報

㉛

眠り病
（嗜眠性脳炎）

「あの日あの時　福島民報」31回目です。今回は大正末期から昭和初めにかけて世界中を震撼（しんかん）させた「眠り病」についての記事です。眠り続けて死に至る場合もある、当時としては恐怖極まりない病気でした。その原因は現在でも判明していないのですが、発生からわずか数年で世界中から消滅したという「嗜眠性脳炎（しみんせいのうえん）」です。日本では関西地方を中心に流行し、県内でも罹患（りかん）者がいました。1924（大正13）年と1929（昭和4）年に掲載された記事を中心に当時の様子を紹介します。この病気について福島医大脳神経内科学講座講師の中原登志樹医師に解説してもらいました。

大正13年 福島来襲

嗜眠性脳炎はエコノモ脳炎とも呼ばれ、第1次世界大戦時に流行しました。高熱と複雑な脳神経症状がみられ、回復期には嗜眠状態（睡眠状態）になる疾患。現在はほぼ発生はありません。罹患（りかん）すると覚醒することが困難で、眠った状態がずっと続きます。まず、1924（大正13）年9月2日に掲載された紙面から抜粋して紹介します。（現代文訳）

先月中旬から関西地方で発生した嗜眠性脳炎は日を追うごとに続出している。性質が伝染病であるため、地方民を恐れさせている。近日東京方面でも発病し、数日前には福島市内においても発生し、3人中2人は発病後、2、3日で死亡した。警察当局は伝染病として防止に努め、直ちに死亡者の住宅を大消毒した。一般に対しても注意を発するなど力を尽くし予防策を講じている。

初めは頭痛がして発熱

本県衛生課では嗜眠性脳炎の伝染系統原因などについて次の様に発表した。

1、原因

病原菌はまだ明らかではないが、伝染力が極めて強いものらしい。

2、伝染系統

まだ明らかになっていないが、恐らく患者の咳によって小滴伝染（患者の唾やたんの小滴）をなすものと認められる。

3、症状の概略

何の前触れ症状もなく、突然悪寒を感じて頭痛、発熱をなし間もなく嗜眠となり他の人から起こされなければいつまでも睡眠を続けるのである。始めは非常に重篤な症状となるが、3、4日経過すれば熱も下がり、睡眠も多少浅くなる。そして軽症の者は快癒する。重症者は発咳（はつがい）不能となり、上眼瞼（がんけん）力重く、自然に下垂し四肢はこわばり大小便は失禁し、意識不明となり食物を全くとれないために衰弱し1週間から10日の間に死亡する者が多い。

4、本病の特徴

（イ）発病後、間もなく嗜眠に陥ること

（ロ）四肢がこわばること

（ハ）眼瞼が下垂すること

5、予防方法

（イ）まず患者を一室に隔離すること

（ロ）患者の鼻汁たんおよび患者に用いた器具、布片、紙切れ、衣類、寝具、飲食器具、書籍、玩具、病室の畳、建具などは消毒すること。

（ハ）患者に接近する人は十分手足や衣類を消毒するほかマスクをかけ、うがいすること。

患者は初期に適当の治療を加えると治癒する者が多い。少しでも前記のような症状がある者は速やかに医師の診断を受けること。

香川で死者950人

1924（大正13）年9月5日付朝刊には、内務省調査として全国の発生状況が報道されています。近畿、四国地方で大勢の罹患（りかん）者が出て、特に香川県では総数1719人、死亡者950人という膨大な数となっていたそうです。

伝染力が強く各地で流行し恐れられているが、いまだに正体が判明せず、的確な予防法が講じられていないとしています。

内務省が患者が多い岡山、香川、徳島県に派遣して現地調査をしたところ、患者の状態は脳脊髄膜炎に類似のもの、あるいは英国に流行した嗜眠性脳炎に類似のもの、あるいは全然これらに似ていない特殊な症状のものと、症状が一定しなかったとのことです。

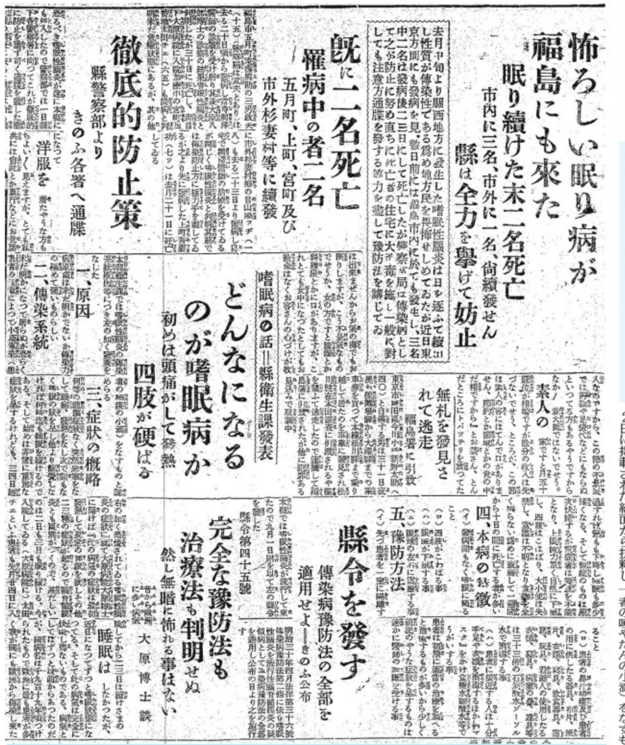
罹患者は若い年代と60歳前後の老人に多い模様で、中年者には比較的少ない、と記されていました。

昭和4年にも

嗜眠性脳炎は1929（昭和4）年8月から9月にかけても国内で発生しました。9月3日付朝刊に「京都で眠られぬ病気発生」という記事が載り、8日付には「福島にも眠り病　八月中旬頃から発生　三名死亡二名全快」の見出しで掲載されています。

この紙面で談話を載せた福島市の大原病院・岩永幾太郎博士は、11日付から連載「流行性脳炎の話」を6回掲載しています。この病気の症状、患者の容体、歴史、予防方法などを詳しく書いています。特に、嗜眠性脳炎の後発病する可能性の高いパーキンソン病との関連性なども考察しています。

岩永博士は佐賀県生まれで東大医学部卒。1916（大正5）年、当初は済生会病院に勤めるはずでしたが病院改築のため大原病院の勤務医となりました。戦後は県医師会長、県保健衛生協会長、初代福島ロータリークラブ会長などを歴任し、本県の医学界、公衆衛生、奉仕社会に貢献した人物です。



怖ろしい眠り病が福島にも來た

眠り續けた末二名死亡

市内に三名、市外に一名、尚續發せん

縣は全力を擧げて防止

去月中旬より關西地方に發生した嗜眠性腦炎は日を逐ふて續出し性質が傳染性である爲め地方民を畏怖せしめてゐたが近日東京方面にも發病を見、數日前には福島市内に於ても發生し三名中二名は發病後二三日にして死亡したが警察當局は傳染病として之が防止に努め直ちに死亡者の住宅に大消毒を施し一般に對しても注意方通牒を發する等力を盡して豫防法を講じてゐる

既に二名死亡

罹病中の者二名

五月町、上町、宮町及び市外杉妻村等に續發

徹底的防止策

縣警察部より きのふ各署へ通牒

嗜眠病の話＝縣衛生課發表

どんなになるのが嗜眠病か

初めは頭痛がして發熱

四肢が硬ばる

一、原因

二、傳染系統

三、症状の概略

四、本病の特徴

五、豫防方法

無札を發見されて逃走

福島署に引致

素人の

縣令を發す

傳染病豫防法の全部を適用せよ—きのふ公布

縣令第四十五號

完全な豫防法も治療法も判明せぬ

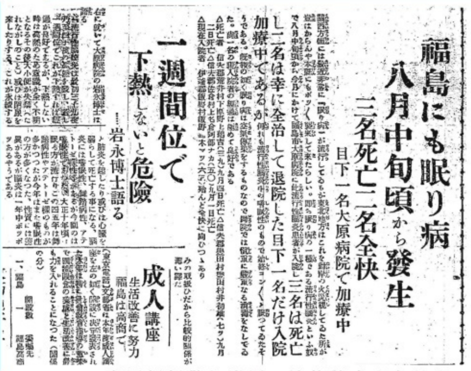
然し無暗に怖れる事はない

大原博士談

睡眠は

洋服を

1924（大正13）年９月２日付朝刊５面　最初の流行を伝える



福島にも眠り病

八月中旬頃から發生

三名死亡二名全快

目下一名大原病院で加療中

一週間位で下熱しないと危險

…岩永博士語る

成人講座

生活改善に努力

福島は高商で

1929（昭和４）年９月８日付朝刊２面　再び流行の兆しの記事

世界震撼 謎残し消滅

その後流行なく 心配無用

福島医大脳神経内科学講座講師
中原登志樹医師

嗜眠性脳炎について解説する中原医師

嗜眠性脳炎は流行性脳炎の一つで、1917（大正6）年にコンスタンチン・フォン・エコノモ（オーストリア）によって報告されたことから、エコノモ脳炎とも言います。1918年ごろから約10年間に渡って、全世界で約500万人が罹患(りかん)し50万人が死に至ったとされています。

日本では1919(大正8)年に新潟などで発症が確認されています。風邪のような症状から始まって、頭痛、節々の痛み、傾眠（ウトウトとまどろむ程度の軽い意識障害）状態になり、数日で死亡する患者もいました。また、反対に全快する症例もあったそうです。

急性期には脳幹部の炎症のため患者の多くは目が動かなくなったと記録されています。また治癒したと思われていた患者の約3分の1が、数カ月から数年後にパーキンソン病に似た症状を発症したことがこの脳炎の特徴であり、脳幹の一部である中脳の黒質ドパミン神経細胞の荒廃（神経の減少）がパーキンソン様症状の原因と考えられます。

本症の原因はインフルエンザや他のウイルス、細菌などが疑われましたが、現在でも全く分かっていません。突然流行して世界を震撼（しんかん）させて、10年後には突然姿を消しました。本当に多くの謎を残したまま消滅した病気の一つです。

ただ、この脳炎はその後の流行は確認されていませんので、いたずらに心配する必要はありません。

1929(昭和4)年に〝最後の流行〟があった際に、福島民報に連載された大原病院の岩永幾太郎医学博士の連載「流行性脳炎の話」は、興味深いものがあります。9月11日から16日まで6回の連載です。

岩永博士は原因のさまざまな可能性、実際に診察した患者の様子、予防方法を詳細に書いています。そして、嗜眠性脳炎とパーキンソン病との関連性を指摘するなど、情報が入らなかったと思われる当時としては、素晴らしい考察をしています。

このような福島県の先人を誇りに思います。

岩永博士が連載 パーキンソン病にも言及

1929（昭和4）年9月11日付朝刊から6回にわたって掲載された大原病院・岩永幾太郎博士の連載の初回記事を抜粋し読みやすい文章で紹介します。

◇　◇

「流行性脳炎」というのは一つの病名であって「嗜眠性脳炎」というのはそのうちの一つにすぎない。また「嗜眠性脳炎」というよりも「流行性脳炎」という方が合理的であるということから、少なくとも学者と名のつく人は今は大概この名前を用いている。

（中略）

流行性脳炎がいつ頃初めてこの世に現れたかということはちょっと分からない。しかし、1890（明治23）年頃、今から約40年前に流行感冒が大流行した際にイタリアに「ノーナ」と称される一種の睡眠病が流行したことがある。これも確かに今日の流行性脳炎と同一だったと一般には信じられている。

○　○

嗜眠性脳炎(流行性脳炎)という病名は、やはり流行感冒の流行していた1917（大正6）年にエコノモという人がウィーンで発表したのに始まっている。この疾病は、その年の内にオーストリアに広がり、翌1918年には欧州全土にわたって、さらにその年の秋には北米大西洋沿岸に現れ、1919年の秋には太平洋沿岸に到達した。

わが国では大正8年、すなわち1919年に秋田中氏が、長野県にこれを発見したのが始まりで、その後各地に広がり、大正12、13年頃にはかなりたくさんの例が報告されている。

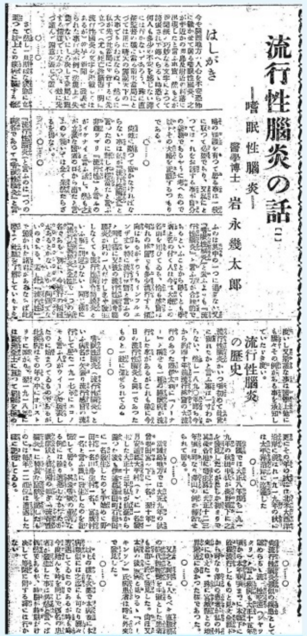
福島地方では、1920（大正9）年の秋、曽根田宮ノ下の1人、翌年1月に安達郡大平村(?)に1人。大正13年に私が仙台から帰った後も、伊達郡藤田町石母田に1人発生したのを始めに野田村1人、川舟生村1人、富成村1人発生したのを記憶している。その後、嗜眠の顕著な例にはあまり遭遇しなかったが、眠症状と筋強剛のような「流行性脳炎」に特異な症状をした者には毎年1、2回ぐらいは遭遇したように記憶している。

○　○

なお、流行性脳炎に類似した疾患として認められる流行性吃逆（シャックリ）という疾病も大正15年頃から本年春頃までに県内に流行したものとみえ、全県からかなりたくさんの患者が私の外来を訪れた。ことに宮城県との境界付近に多かったようだ。

○　○

また、これと同列に入るべき直腹筋の間代性痙攣（かんたいせいけいれん）を主徴とした患者も福島市で発見した。また、本病の後に発病したとみられる「パーキンソン」病患者は時々外来で発見した。



流行性腦炎の話（一）

—嗜眠性腦炎—

醫學博士　岩永幾太郎

はしがき

流行性腦炎の歴史

1929（昭和４）年９月11日付朝刊２面
岩永博士の連載の初回

紙面そーか!

嗜眠性脳炎を題材にした映画が1990（平成2）年に世界各地で公開されました。福島医大の中原登志樹医師によると、脳神経内科に携わる医師は1度は鑑賞すると言われる映画で、公開名は「レナードの朝」（原題は「Awakenings」）です。受賞できませんでしたが、アカデミー賞にも3部門でノミネートされました●嗜眠性脳炎で30年間眠り続けた患者レナード（ロバート・デニーロ）に医師マルコム（ロビン・ウイリアムズ）がパーキンソン病向けの新薬を投与し一時的に覚醒します。同様の症状だった20人も覚醒しますが、最終的には元の状態に戻ってしまいます。ただ、レナードは覚醒した時期に、恋をして生きる幸せを感じます。ほんのひとときでも覚醒して幸せを感じることと、幸せを知らないで眠り続けること。どちらが幸せなのか。問いの答えはでません●文字通り「目覚め」という意味の「Awakenings」。原作はイギリスの神経学者オリバー・サックスが自らの医師としての実話を元に書きました。本県でも翌年の1991年には公開されており、ご覧になった方も多いと思われます。現在はDVDやネット配信でも視聴可能ですので、興味のある方は鑑賞してみてはいかがでしょう。

福島民報に掲載された主な嗜眠性脳炎の記事（付日）

1924年 大正13年	9月	2日：恐ろしい眠り病が福島にも来た／眠り続けた末２人死亡
		3日：白河にも眠り病／18歳の娘 福島にまた１人
		5日：嗜眠患者の過半数は死ぬ／内務省の調査
		9日：相馬郡にも眠り病
		12日：古河炭鉱長屋に嗜眠病発生／21歳炭鉱夫／先月まで横浜にいた
		13日：ねむり病が郡山在に発生／６歳女児
		18日：郡山在多田野村にも／眠り病者発生す／５歳の少女 相馬の眠り病者１人死亡
1929年 昭和４年	9月	3日：京都で眠られぬ病気発生
		8日：福島にも眠り病、８月中旬から発生
		10日（夕刊）：法定伝染病にない今回の流行性脳炎
		11日：16日まで／岩永幾太郎博士の連載６回